

A 課題の整理 援助者が感じている課題

事例にあげた課題に対して、あなた自身が困っていること、負担に感じていること等を具体的に書いてください。

- ・本人の自己中心的言動やイライラに対してうまく対応や声掛けができないことが多く、他利用者と本人の関係障害やストレスを軽減できない場合も多く困っている。
- ・本人への関わりが慎重になり過ぎることがあり、自然な関わりが少なくなっている。それは本人にも感じられていると思う。(積極的な関わりは避けている)
- ・本人の自己中心的言動やイライラに対して腹立たしくなり、全人的理解に欠けていると思われる心理状態になることがあり、介護という仕事に自信がなくなる。

【質問】

このような困り事や仕事に自信がなくなることは、あなた以外のスタッフにもありますか？

【回答】

全員にあると思います。

B 課題の整理 援助者が想定する対応・方針

あなたは、この方に「どんな姿」や「状態」になって欲しいのですか。

- ・共同生活や他利用者への理解を持てるようになり、その中で生活を楽しめるようになって欲しい。例えば、台所仕事でも皆で協力し合える、散歩や外出、買い物等も他利用者とペースを合わせる、交代で行う、他利用者のものは勝手に持っていく等の理解をし、仲良く生活できるようになって欲しい。

【質問】

あなたの描いた姿や状態は、本人の性格や思いに近いと思いますか？ それとも、あなたの理想に近いと思いますか？

【回答】

私の理想に近い部分も多いと思いますが、本人に、例えば外出の際、皆とペースを合わせてもらえるようあらかじめ伝えておける場合もあり、その場合は皆とペースを合わせられます。

本人は、短期記憶の障害がありますが、自覚を持てる場合もあります。

そのために、当面どんな取り組みをしたいと考えていますか(考えましたか)。

- ・本人が、家事仕事等、他利用者のやり方が気に入らず口出し手出ししそうな場面では、本人と他利用者の様子を見て本人との間に入り、本人には別のことを頼む等したりして、他スタッフがフォローに入り関わりがスムーズに行くようにする。
- ・本人の得意とすること(米研ぎ、ポットの水足し、洗濯物干し、干切り、社交ダンス、散歩等)で力

を發揮できる場面を個人的につくり、本人を頼りにしていることを伝え、満足を感じられるようにする。

- ・本人の様子を見て、外出や散歩、行事等の場合、事前に話をして共同生活上の理解を求めると同時に、本人のストレスを軽減するような散歩や外出支援を行っていく。

**【質問】**

あなたが考えた取り組みを、本人のケアプランの「総合的援助の方針」や「長期目標」と比較してみましたか？ また、比較して感じたことはどんなことですか？

**【回答】**

生活全体の目標としては、「不安なく穏やかに、安心して過ごす」「自分のことは自分でできる自立した生活を送れるように支援する」です。長期目標としては「楽しみある安心した生活を送りたい」というもので、この取り組み目標は、そんなに遠いものではないと思います。ケアプランに組み込んでもいいのではないかと感じています。

**C 本人の状態や状況を事実に基づいて確認してみよう**

困っている場面で、本人が口にする言葉、表情やしぐさ等を含めた行動や様子等を事実に基づいて書いてください。

- ・「なにモタモタしているの！貸してみなさい！」「これでいいの！」台所で他利用者が具材切りや盛り付けをしていると自分が強引に割り込み、自分のやり方でその仕事を取り上げる。
- ・イライラした表情で手伝い、菜箸をシンクに投げ入れたり、鍋や食器を雑に取り扱い大きな音を出したりする。
- ・他利用者がやっていることを、何か言いたげな表情で自分の席から見ている。
- ・「何でそんなこと言われなくちゃなんないの！」「そんなことしない。」自分の食器を洗って欲しいと声掛けをすると、大きな声で反発し、それを他利用者にも話して同意を求めている。
- ・散歩に行く時や、冷蔵庫を開ける時等、「自由がない！」「監視されているようで嫌だ。」と訴える時がある。

**D 課題の背景や原因等の整理**

本人にとっての行動や言葉の意味を理解するために、別紙の展開図に記入してから、課題の背景や原因として考えられることを書きだしてみましょう。

- ・今まで一人暮らしをしており、自分のしたいように生活し、他人との共同生活に馴染めない。また子供がおらず、他人のペースを受け入れる習慣が少ない生活だったのではないか。
- ・記憶力について自分でも不安に感じており、イライラ感につながるのではないか。
- ・本人のやれること（洋裁等）実力を發揮できる場面が少ないのではないか。
- ・性格（性分）によるものも大きいのではないか。
- ・自立度が高い自分に比べ、他利用者ができないことに対するイラつきがあるのではないか。

## E 事例に書いた課題を本人の視点に置き換えて考えてみよう

ここで、この事例を本人の立場から、もう一度考えてみましょう。

本人の言葉や様子から、本人が困って（悩んで）いること、求めていることは、どんなことだと思いますか？

- ・自分がやれば早いのに何で皆はできないのか、イライラする。
- ・自分の実力はこんなもんじゃない。
- ・もっと自由にしてほしい。散歩にもついて来ないで欲しい。自分は大丈夫である。
- ・なんだか最近分からないことが多くなってイライラすることが多く不安だ。
- ・冷蔵庫を開けて勝手に食べたくらいで、いちいち文句を言わないで欲しい。そういう考えが普通である。
- ・人から言われてするのは嫌だ。指示はいらない。

### 【質問】

ワークシートBの であなたが描いた本人の「姿」や「状態」は、本人の気持ちに沿ったものだったでしょうか？

### 【回答】

本来の本人の「姿」としては、「皆と仲良くして暮らしたい」という根本的なところはある方だと思います。

ただ、今まで子供もおらず、自分の好きなように生きてきた部分もあり、その辺で皆と小さな生活上のくい違いがあるのではと思われます。

本人の気持ちにも本質的には沿っているものであり、その部分を支援していくことで、本人が、より生活をスムーズに楽しんで過ごせるようになっていっています。

## F 課題解決に向けた 新たなアイデア

あなたが、このワークシートを通じて思いついたケアプランなど、新しいアイデアをいくつか書き出してみましょう。

- ・「手伝って下さい。」という声掛けではなく、「教えてもらえませんか。」等の声掛けにし、本人のやる気を引き出し、終了時には感謝の言葉を伝えていく。
- ・「米研ぎ」「ポットの水足し」ができるよう、釜が空いているのが分かるようにして置いたり、やかんに水を入れ、本人が気づくのを待ってみたりする。本人の役割としていく。
- ・皆で家事作業中、本人が口を出したいような時は、他の作業をお願いしたり、他スタッフがフォローに入ったりするなどし、スイッチングを行う。
- ・基本的に一対一の対応を心掛け、様子を見ながら、本人の気持ちを傾聴する時間をつくる。
- ・洋裁の実力が発揮できる場所を作っていく。
- ・散歩したいような時は、他利用者も含めこちらから声掛けし、同行する。また、一人の散歩の時は本人に気づかれないような位置にて見守るか、スタッフ自身も散歩したいことを伝え、同行する。
- ・冷蔵庫内の個人のは、分かりやすいように区別する。
- ・誕生会や行事等を行う場合は、参加者や日程等、事前に紙媒体等で周知し、本人の考えとの擦り合わせを行い、当日のイライラ感を軽減する。

### 【質問】

この新たなプランは、ケアマネジャー(計画作成担当者)と相談して、反映させることができそうですか？ また、スタッフ皆で共有して、課題解決に取り組みそうですか？

### 【回答】

ユニットのスタッフ間では、既に皆で問題解決に取り組んでおり、一部は、特にケアプランに挙げてはいないのですが、ユニット内で実行して対応している部分もあります。

今後、新しいケアプランを立てるということもあり、ケアマネジャーと相談して反映させていくことも可能だと思います。

### (助言者の考察)

本人の自己中心的言動やイライラに対して、スタッフがうまく対応や声掛けができないようですが、認知症の人の自己中心的と思われる言動やイライラには理由があります。

認知症の症状の現れ方は様々で、例えば見当識障害もなく、日常生活は自立していた人が自分の失敗に気づきはじめたとき、誰もが自分の将来に不安を抱くと思います。「何も分からなくなったらどうしよう」という不安やいら立ちが、介護者に対する抵抗となって現れたりします。その抵抗は、不安な気持ちを分かってもらおうとしている現れなのかもしれません。

介護者が、認知症の人の表面の行動に目を奪われると行動の本質が見えなくなり、しかも対応するだけでいっぱいしていると、認知症の人は介護者に対して不信感を抱くようになります。認知症が進むと自分の気持ちや思いを、言葉を使って適切に訴えることができないため、周囲はその認知症の人の苦痛や不安を把握するのが困難になります。そのため、介護者の行うことが良かれと思って行うことでも「押しつけ」になってしまい、認知症の人が混乱を引き起こしたり、不安や焦燥感を持ったりすることになります。介護者の思うようにならないからといって、腹を立てたり、ことを焦って無理強いしたりすると、さらに抵抗が増して思わぬ行動を引き起こす原因になります。

日常生活のちょっとした場面、例えば着替えや食事、入浴などで言葉掛けを多くしたりすることで、認知症の人に、感情的な温かさや優しさが伝わります。自分に特別な関心を寄せる人の存在を感じることで、認知症の人は安心し、心の拠り所が生まれるからです。

積極的な関わりを避けたり、さらにはスタッフが腹立たしくなり、そのため仕事に自信が持てなくなったりしているような状況が全員にあるとのことですが、もう一度自分たちの「仕事」について、この機会に話し合ってみてはいかがでしょうか。例えば、「分かったつもり」や「既に行っているつもり」といったことが、意外と仕事をする上での落とし穴になっている場合もあります。

スタッフの皆さんが、課題解決に向けて検討した創意・工夫の内容を共有し、自信を持ってこれからも仕事に励んでいくことを期待しています。